音　楽

学び合いの中で思考力・判断力・表現力を育む音楽学習

1　音楽科で願う豊かな学びの姿

初めはだれも「ハモリって何？」という質問に答えられませんでした。でも，「レッツダンス」を男女別や同性チームで10回，20回，30回，40回，50回と何回も歌っているうちに，ハモリということがわかってきました。ハモリとは，高い声と低い声が重ね合うことです。また，きれいな声で歌うとよく響きました。何回も歌えたのは，ハモリがあったり，高い声をきれいに出したいって思ったりしたからだとぼくは思いました。だから，これからもハモリのことを忘れずに歌っていきたいです。　（小学４年　児童Ａ）

イタリア語の曲は，「サンタルチア」「帰れソレントへ」を歌ったことがありましたが，今回の「オーソレミオ」では，イタリア語を自分たちで日本語に訳すことから学習しました。文法は分からなくても単語一つ一つの意味をグループ内でつなげていくうちに，何となく詩の内容が膨らみました。完成した日本語訳を教えてもらうより，自分たちが訳した言葉だから，よりその歌詞への思いが深くなったし，それを歌で表現するときにも強弱や言葉のニュアンスを伝える歌い方など，こだわりをもって意見を言ったり歌えたりできたように思いました。

（中学３年　生徒Ｂ）

上記の文章は，児童Ａは小学４年「部分二部合唱を楽しもう～音の重なりを味わいながら～」の学習後に，生徒Ａは中学３年「思いや意図を音楽表現につなげよう～カンツォーネ～」の学習後に書いたものである。児童Ａのふりかえりからは，旋律の重なりを鑑賞したり表現したりする学習を通して，合唱の特徴であるハモることのよさに気付き，さらにそのハモる楽しさを求めるためにきれいな声で歌おうという姿がうかがえる。生徒Ａのふりかえりからは，歌詞の意味を探り，その意味やメロディ（音）から感じるものを言葉で伝え合いながら音楽表現を工夫していく学習を通して，他者の意見を聞きながら自分の感じ方を深め，思いや意図，音楽表現にこだわりをもって高まっていこうとしている姿がうかがえる。

本学校園音楽科では，11年間の学びを考えたとき，「無邪気に音楽を楽しみ，心をわくわくドキドキさせ，あこがれをもって『音楽っていいなあ』『表現するって気持ちいいなあ』と純粋に感じる心と豊かな表現力が育つ」ことを願っている。そこで，日々の授業や音楽活動における子どもたちの様子を観察する中で，音楽科として求める「豊かな学びの姿」を以下のようにまとめた。

○　音楽活動に進んで取り組もうとする姿
○　表現や鑑賞に必要な知識や技能を身に付けようとする姿
○　仲間と一緒に楽しく活動しようとする姿
○　よりよい音楽表現にするために工夫しようとする姿
○　音楽活動の楽しさや感動を味わおうとする姿
○　音楽を生活の中に取り入れようとする姿

2　昨年までの研究の経緯

(1) 音楽科における思考力・判断力・表現力

学習指導要領の内容から思考力・判断力・表現力を次のようにとらえた。

○　思考力・・・イメージする力・理解する力
　　「音（音楽）を聴いてイメージをふくらませる」「楽譜を見て理解する」など
○　判断力・・・選ぶ力・工夫する力・感受する力
　　「音素材や音楽を形づくっている要素を選ぶ」「表現を工夫する」など
○　表現力・・・生かす力・表現する力
　　「音楽を形づくっている要素を生かす」「思いや意図を演奏や言葉で表現する」など

「思考力」とは，一般的に論理的思考力（物事を論理的に考える力）と創造的思考力がある。創造的思考力とは，流暢性（考えをすらすらとよどみなく作り出す），柔軟性（いろいろな角度から柔軟に考える），独創性（新たな考えを生み出す）を中心として，応用性，構想性，敏感性を兼ね備えた「考える力」のことであり，まさに発想力・想像力（イメージ力）に通じ，音楽科でいう「思考力」とは創造的思考力の関与するところが大きいととらえた。「判断力」は，イメージしたものを表現へとつなぐ役割をしており，イメージしたものを表現するために，どの音素材や音楽を形づくっている要素を用いるか選んで，工夫する力である。また，ある音や音楽を聴き，イメージをふくらませる（思考する）中で瞬時に自分なりにその音や音楽を感受する（判断する）ことが多々ある。このように思考と判断は分かれることなく，ひとまとまりでくくることができるととらえた。「表現力」は，技能的側面を用いながら判断した音素材や音楽を形づくっている要素を生かしたり，思いや意図，イメージを表出したりしていく力である。思考力・判断力・表現力のサイクルは，「思考力」から「表現力」への一方通行ではなく，それぞれの間を行き来しながらより高い段階へと発展していくものととらえた。

また，一貫教育という視点から，それぞれの発達段階での思考力・判断力・表現力を次のように設定した。

初等部前期	音楽を感覚的にとらえ，音楽やその演奏の楽しさを感じながら表現することができる力
初等部後期	思いや意図をもって，曲想にふさわしい表現を考えたり，自分や友だちの考えを生かしたりしながら表現することができる力
中　等　部	自分の表現意図を曲想と関わらせ，知識〔共通事項〕・技能を活用して表現することができる力

初等部前期での思考力・判断力・表現力は，感覚的に音楽をとらえる力が主であり，これがその後の学びの姿のベースになっていく大切な部分である。そして初等部後期では思いや意図を明確にもてるようにし，自分と他者の考えや表現を比較しながら思考をより高い段階へと発展させていく。さらに中等部になると自分の表現意図を曲想と関わらせ，これまでに学んだ知識や身に付けた表現の技能を活用して言葉や演奏で表現していく。このように初等部前期から中等部までの発達段階における思考力・判断力・表現力の違いやつながりを意識すると共に，一貫教育における積み上げを大切にした学習活動を展開していくことが重要であると考えた。

さらに，昨年度から研究を進めている「歌唱」分野での育てたい思考力・判断力・表現力を次のように設定した。

初等部前期	自分の歌声や発音に気を付けて，歌詞の表す情景や気持ちを想像したり，拍の流れやフレーズを感じ取ったりして歌う力
初等部後期	呼吸や発音の仕方に気を付けて，自然で無理のない響きのある声で歌い，歌詞の内容や曲想を生かした表現を工夫したり，各声部の歌声や全体の響きや伴奏を聴いたりして，声を合わせて歌う力
中　等　部	曲種に応じた発声により，　歌詞の内容や曲想を味わいながら，声部の役割を生かしたり，美しい表現を工夫したりして，全体の響きに調和させて歌う力

(2) 思考力・判断力・表現力を育てる学び合い

①　学級全体で学び合うための授業の構造

子どもたちが〔共通事項〕を学習の支えとしながら，より豊かに音楽表現を工夫したり，鑑賞を深めたりする手立てを模索してきた。その結果，子どもの主体的な聴き取りから子どもたち自身が課題に気付き，音楽的な感受をもとに全員で一つの音楽をつくっていく活動を多く設定し，楽曲の特徴やよさなど，思考・判断したことを言葉で表し，言葉を媒体として伝え合うことで，学びの質を互いに高め合うことのできる課題や場面を設定することが有効であると明らかになってきた。

また，個やペア，グループで取り組んだ内容や成果を学級全体に発表し，それぞれが感じたことや表現したいことなどを伝え合ったり，よさを認め合ったりする活動や場面を繰り返すことで，自分や友だちのよりよい表現のための工夫を子ども自身が見いだすことが分かってきた。

②　学び合いの場面での教師のはたらきかけ

子どもたちが互いに感じたことや思ったことを比較したり，関連させたりするための教師の発問の工夫や受け止めが大切である。ペアやグループによる歌唱練習において，響き合いを感じ取る部分を限定して焦点化させる（提案する）はたらきかけと，ペアやグループの演奏の仕方の違いから，演奏のよさを感じ取らせるというはたらきかけを行うことによって，子どもたちは響き合いのよさを感じ取ることができた。そして，子どもの表現の工夫を認めたり，歌い方を教師が適切にはたらきかけたりすることで学習が深化することも分かってきた。

(3) 思考力・判断力・表現力の評価

子どもの発言や演奏，時間のふりかえり，自己評価カード，演奏の録音などから子どもの変容をとらえた。具体的には，音楽を形づくっている要素を知覚し，それらの働きが生み出す特徴や雰囲気を感じ取ることができているか，歌詞の内容や曲想にふさわしい表現を工夫し，どのように表すかについて自分の考えや思いをもっているかに着目した。演奏の録音や録画を活用することで，「学びの変容」を教師や子ども自身がとらえることができ，自己評価に有効に作用した。

3　本年度の研究

(1) 学んだことをいかしている子どもの姿

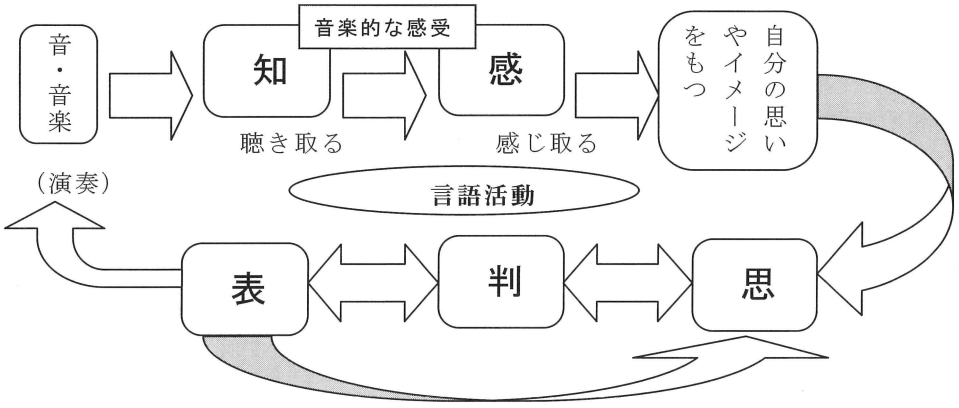
音楽科では，学んだことをいかしている子どもの姿を「子どもが感じ取ったり，気付いたりしたことをもとにして，さらにその音楽表現を工夫しようとしたり高めようとしたりしている姿」，言い換えれば，「自分の考えや思い，意図を確かめるために繰り返し試し，よりよい音楽表現を追求している姿」と考える。例えば，ある曲の演奏をグループで発表した際に，グループごとのよさを感じ取ったことを伝え合い，そのよさを自分たちの演奏にも取り入れてみようとする姿である。また，ある歌唱の演奏として「なめらかな表現」を求めるとき，一言で「な

めらか」といってもその演奏はさまざまである。その曲の特徴や雰囲気，歌詞の意味などから「なめらかさ」の度合いを吟味し，そのなめらかさを実現するための技術的な試行錯誤を繰り返し，さらに聴き合いを繰り返し，考えや思い，意図に近付くための高め合いを行うような姿である。これらをいかしている姿ととらえ，このような姿を育てていきたい。

⑵ 学んだことをいかすための授業構想

音楽の授業において，感性を高め，思考・判断し，表現する学習プロセスは，音楽的な感受をもとによりよい音楽表現を求めて思考・判断・表現を繰り返すことでより高い段階へと発展していく。この学習プロセスのスタートは，子どもの主体的な聴き取りから始まっており，どう学習課題に出会わせるかが大切となる。このプロセスをベースにして下記の３点について追究していきたい。

【学習プロセス】



① 音楽を形づくっている要素の焦点化

音色，リズム，速度，旋律，強弱，音の重なりや和声の響き，音階や調，拍の流れやフレーズなどの音楽を特徴付けている要素や反復，問いと答え，変化，音楽の縦と横の関係などの音楽の仕組み，音符，休符，記号や音楽に関わる用語のうち，単元のねらいに即した要素に焦点をあてた授業を構想する。

② 音楽的な感受ができる提示の工夫

子どもたち自身が音楽を形づくっている要素を知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受できる教材や聴き比べなどで提示する参考演奏（音源）の選択をする。また，類似したものを聴かせたり，逆に相反するものを聴かせたり，その聴かせ方を工夫する。

③ よりよい音楽表現を求める活動の設定

これまでも個→グループ（ペア）→全体→グループ（ペア）→個などの「行きつ戻りつ」の繰り返しを「往還」とよび，重視してきた。この繰り返しの活動形態をより子どもたちの実態（発達段階，意欲，音楽体験度など）や単元のねらいに即してさらに取り入れていきたい。また，生徒の感じ方や表現を認める教師の姿勢と，子どもたち同士の言葉をつなげていく教師の言葉かけを大切にしていく。

4 成果と課題

単元のねらいに即した要素に焦点をあてた授業を構想し，さらに個→グループ（ペア）→全体→グループ（ペア）→個などの演奏形態を繰り返すことによって，お互いのよさを感じ取ったり，気付いたりできるようになり，自分たちの演奏にも取り入れてみようとする姿が徐々に見られるようになってきた。今後，さらによりよい音楽表現を求めようとする子どもの姿を求めていきたい。

（文責　小村　　聡）